

発明の周辺：その2「感性を磨く」

松原, 幸夫
元九州大学教授

<https://hdl.handle.net/2324/4737394>

出版情報：知財コンサルブログ. 18, 2021-09-16. Japan Patent Data Service Co., Ltd
バージョン：
権利関係：



発明の周辺 その2 「感性を磨く」

松原幸夫

大学にいたときには、暗黙知というテーマでものづくりについて研究をしていた。暗黙知といっても「言葉で表現できないもの」という定義であり、研究されること自体を拒んでいるようにも思えるこの言葉を研究することは、なかなか大変なことである。その一方で、ちょうど般若心経の前半部分のように、言葉でいい表せないことをその周辺を否定することで表現しているので、どちらの方向に進んで行ってもよいという大変自由度の高い魅力ある言葉としてとらえることもできる。

「友に求めて足らざれば、天下に求む。天下に求めて足らざれば、古人に求む。」（友人に聞いてわからないときは、世界中の有識者に聞く。それでもわからないときは、先人の足跡や古典を調べる。）という山田方谷の言葉があるが、親しい友人や恩師、ものづくりや伝統工芸にたずさわる方々に暗黙知についてどのようにとらえているか聞いてみた。

暗黙知という言葉は否定語で定義されているので、これに類似するものでポジティブな言葉がないか探してみたところ、感性とか第六感、直感という言葉が求めていたものに近いことがわかった。辞書によれば第六感の意味は、「五感以外の感性」とある。直接五つの器官でわかること以外のことで、物理的人間センサーではとらえることができないものという意味である。

ポランニー博士は、暗黙知の例として人の顔が言葉で表現できないことを挙げているが、人の顔の違いは視覚でわかるものである。第六感の写真でも表現することができない。まさに求めていたものであるように思える。

ビジネスの世界は変動が激しく一寸先は闇ともいえる。そのような中で事業運営や研究開発に一筋の光を投げかけ我々を導いてくれるのはこの第六感ではないだろうか。それは一瞬のひらめきや、小鳥のさえずりの中にあたりする。



江戸時代にはこの第六感のことをロクといい、仕事ができる人のことをあいつにはロクがあるといったという。現代においても研究開発、商品企画から、気候の変化、市場の変化の予測まで、このロクが関係しているものは多いのではないだろうか。

では江戸の町衆たちはどのようにしてこれを磨いたのであろうか。江戸では「第六感を磨くには、五感を磨け」といわれていた。簡単にいえば、おいしいものを食べ、美しい音楽や風や虫の音を聞き、美しい風景や工芸品を見て、また労働や運動で気持ちのよい汗をかき、草花を育てたり、何にでも好奇心を持って取り組み遊ぶことである。

こんな楽しいことばかりしていて、仕事もうまくいくならこんな結構なことはない。筆者が大学を卒業して会社に入ったとき上司からいわれたことは、「毎週NHKの日曜美術館を見ること、古典を読むこと、クラシック音楽を聴くこと」の三点だったが、今でもその教えに感謝している。

その教えは、五感を磨くことで六感を磨きなさいということだったと後になって気がついた。もともと法律や技術の勉強は好きではないので、このアドバイスには大喜びで取り組んだ。そのとおりやってみると今まで知らなかった新しい世界が広がってきた。「サラリーマンって凄い世界だな」と思った。

よく遊んでいると、妙なもので仕事にも自然と全力投球したくなる。仕事に全力投球すると週末の遊びの時間がますます楽しくなる。そしてよく遊んでいるので目の前の仕事に対する感度もあがってくる。



浅井忠 「グレーの洗濯場」 (1901)

大学では、高度熟練技術企業の人材育成というテーマで科研に採択された。そこで高度熟練技術企業の創業者やキーパーソンにヒアリングをしたことがある。

世界最高の技術を極めた人たちは、共通点があった。仕事に精一杯打ち込む一方で、週末は家で家庭菜園をし、絵画や調度品、歴史や文学や音楽にも造詣が深い。食べ物へのこだわりもあり、地元の行きつけの料理店は、外観は普通の料理店であるが料理は絶品であった。

職場においても工場の社員食堂のテーブルと椅子の高さのバランスにミリ単位でこだわっていた。食堂はそこで一番見晴らしのよい場所に設置され、食堂や廊下の床は木でできしており、オイルで磨きあげられている。その木のぬくもりが、仕事で疲れた心身を心楽しい世界へ引き戻してくれる。夢のような世界だと思った。このような小さなことへの気づき、即ち感性と技を極めることは関係があるのではないだろうか。

(2021/11/12改訂)

